

クロスカルチュラルな背景を持つ、元 こどもの経験

金 千佳

医療通訳

初めて同級生から「韓国人だったら、韓国に帰れ！」と罵られたのは、小学校1年生、6歳の時だった。

小学校の受験・入学願書には「金」と書いていたのに、入学前には両親が学校に呼び出され、日本風の「通名」を使うことになった。「お嬢さんが可哀想な思いをされない」ための教育的配慮から、だったと言う。コリアンは見た目では日本人と区別がつかないので、コリアンだとバレなければ、いじめられなくて済むという意味だ。

しかし、常々両親から「韓国人であることは恥ずかしいことじゃない。堂々としていなさい。」と言われていた私は、「私は韓国人」だと自分から言っていた。学校側の教育的配慮にも関わらず、学校の誰もが、私が韓国人だと知っていた。そして、先生達が心配したように、私はそれなりに学校で差別を受けていたということを、今なら思い出せる。

私が大学生の頃は、まだ在日外国人と言えどコリアンの時代で、「在日コリアン3世」だというだけで、論文を書く学生やメディアのインタビューを受けたりしていた。

振り返って悩ましいのは、古いものも新しいものも、まるで被差別経験の記憶だけがすっぽり抜け落ちたかのように、大学生になった私が

「私自身には被差別体験はないと語っていたこと」。

中学生に入学した時には、最初の4週間、毎日、靴箱の名前ラベルがビリビリにやぶられていた。高校生の頃には、教員から「日本に来ているコリアンは皆、もともとレベルの低い人間。日本で良い教育を受けて、日本人に近づけて良かったね。自分のレベルを保つために、もうコリアン集団とは縁を切った方が良いでしょう」と、面と向かって言われた。

大学生になって部屋探しをした時には、仮契約を済ませた不動産屋には、後になって電話で「大家さんが外国人はお断りだと言うので、やっぱりアナタには部屋を貸せない」と。

初めてのアルバイト面接では、「日本の名前はないのか？」と問われ、「お客様と直接接する大事な仕事なのに、金というスタッフを雇うことはできないことは理解できますよね？」と言われ、雇ってもらえなかった。別のアルバイト辞めようと退職届を出した時には、「韓国人！情けをかけて韓国人でも雇ってやったのに、恩を仇で返すのか！」と怒鳴られた。

学校ではずっと「日本は素晴らしい民主主義国で、誰もが平等である」と教えられていたけれど、16歳になった時には区役所で指紋を押さねばならず、20歳になっても選挙通知が届くことはなかった。学校で教わった「誰もが」には、自分

は含まれていなかったことを、大きくなるにつれ理解していった。学校では透明な子どもだったのかもしれない。

当時の日本には、個人的にも制度的にも差別はあり、私自身も少なからずそれを経験していた。しかし私は、「私自身には被差別体験はない」と語っていた。私は「在日コリアンであること」を隠したことはなかったけれど、コリアンであることによる経験や自分の本心は、素直に表現することはほとんどなかったようだ。

あるいは、「今も差別される可哀想な在日コリアン」と最初から書くことを決めて来ている人達に、つい抵抗したくなつたのだろうか？全体としての「在日コリアン」がかわいそうな被差別民であったとしても、自分だけは違うと思いたかつたのだろうか？

あるいは、差別を内在化し、「差別される」ことが普通になり過ぎて、気付かなくなつてたのだろうか？被差別経験を聞いた日本人は、不快に感じてコリアンを嫌うと思ひ込み、目の前のインタビュアーに嫌われないために、言葉を飲み込んだのだろうか？

「ずっと差別されてきた自分」、「今でも差別されている自分」を、ちゃんと自分で受け止める強さがなかったのだろうか？周りには「泣いても良いよ」とか「怒っても良いよ」と言ってくれる人はいなかった。本当のことを言っても、この社会で嫌われずに生きて行ける自信がなかったから、「差別されたことはない」ことにすることが、その時の自分を支える唯一の方法だったのだろうか？

勇気を出して伝えたことが理解されなかつたり拒絶されたりする経験をすれば、言葉や本当の気持ちをますます飲み込むことになる。

あの時インタビューしてくれた人達には、論文や記事に「嘘」を書かせてしまったと思うと申し訳ない。それと同時に、あの時私が答えた言葉が、「3世にもなれば、もう差別はない」と便利に利用されたかもしれないとすれば、自分はな

んて罪深いことをしてしまったのだらうと思う。本当に、自分の弱さが悔やまれる。

子供の頃には解決できなかった問題は、時間が経ったからといって消えるわけではないのかもしれない。それは解決されないまま、ずっと心に深く留まっているようだ。

あれから長い時間が経っている。そして今の日本には、文化的・言語的に多様な背景を持つ人々がますます増加している。新しいそれぞれのコミュニティで、第2世代、あるいは第3世代も生まれ、この日本社会で共に生きている。しかし残念ながら、私たちがずっと前に経験したのと同じような問題に、その子達もまた直面し苦しんでいるようだ。

今、差別に苦しんでいる子どもや若者達には、自分の本当の気持ちを吐き出せる場所があるだろうか？家族以外にも、信頼でき、安心して素直に話せる「誰か」がいるだろうか？

そして、自分自身の辛い経験と向き合い、自分の本当の気持ちを表現することもなく、「自分はもういい大人なのだから」と言ってその方法を探すことすら諦めてしまった元子ども達も、たくさんいるのかもしれない。大人達もまた、そんな場所を探しているのかもしれないと思うのは私だけだろうか？